

研究発表会実施概要

1 日 時 平成18年11月15日(水) 15時～

2 場 所 関西大学会館 地階 理事会議室

3 内 容

(1) 研究発表 (15:00～15:40)

・大和正史法科大学院教授、木村哲也法科大学院教授

発表テーマ「日本司法支援センター(法テラス)の現状と課題」

・春名 匠工学部助教授

発表テーマ「フッ化物水溶液中で耐食性を示すチタン合金の開発」

(2) 質疑応答 (15:40～16:00)

4 大学側出席者

大津留智恵子学長補佐

大和正史法科大学院教授

木村哲也法科大学院教授

春名 匠工学部助教授 他

5 参考資料

(1) 山田洋次客員教授講演会「撮影場は大学だった～映画と歩んだ45年～」チラシ

(2) 関西大学公開シンポジウム

「ヒトはなぜ笑うのかー笑いの総合科学をめざしてー」チラシ

(3) 関西大学プレスリリース KU EXPRESS (No. 37)

「産学連携の研究成果を広報グッズに活用」

以 上

日本司法支援センター（法テラス）の現状と課題

法科大学院 教授 大和正史・法科大学院 教授 木村哲也

【概要】

今般の司法制度改革が目指す「法化社会」、つまり生活上のトラブルや課題を、法律によって解決し、予防する社会を実現するには、国民が法をもっと身近に感じることができ、また垣根を低くして司法に気軽にアクセスできるようにする必要がある。そのための具体的な取り組みが、国民が司法の場に参加する「裁判員制度」、どこにいても気軽に司法を活用できる場を作る「司法ネット」、そして、質の高い法曹の数を増やす「法科大学院を中心とする法曹養成制度」である。法科大学院は2004年にすでに開設され、裁判員制度は2009年からスタートする。一方、司法ネットを具体化したものが日本司法支援センター（法テラス）である。

この10月2日から始動した法テラスは、相談者に適切な窓口をアドバイスする情報提供業務、資力の乏しい人の民事法律扶助や国選弁護の円滑な遂行、犯罪被害者支援、および司法過疎対策を業務の中心に据えている。業務開始から1カ月間に約4万4000件の相談（うち東京のコールセンターへの相談は約3万5000件）があり、順調な滑り出しのようであるが、相談者のニーズと提供情報が必ずしも合致していないとの声も聞こえる。また、将来の司法サービスの増加に対応するには、スタッフ弁護士や契約弁護士を十分確保しなければならないが、その養成のためには、法科大学院との連携についても検討する必要がある。

研究発表では、11月18日（土）に本学で開催される法テラスに関するシンポジウムで取り上げられる主要な検討課題を紹介することにしたい。

【プロフィール】

大和正史教授

1953年北海道旭川市生まれ。新潟大学で学部、修士課程を学び、神戸大学博士後期課程に在学中に本学の助手試験に合格、93年に法学部教授に昇任、04年から法科大学院に移籍。商法（会社法）専攻。これまでは結合企業規制を主要なテーマとして、ドイツ法およびEU法を手がかりに比較法的な研究を行ってきたが、最近では、企業価値に関する会計学・法学の視点からの共同研究やコンプライアンス・内部統制システムに関する研究にも取り組んでいる。

木村哲也教授

1979年本学法学部卒業、翌年司法試験合格。81年司法研修所入所、83年4月弁護士登録。87年写真週刊誌がエイズで死亡した女性の顔写真を無断掲載した事件で、女性の両親の訴訟代理人の一人となり、写真週刊誌を被告として名誉毀損・プライバシー訴訟を提起し89年勝訴。以後同種の訴訟を多数手がけ、マスメディアによる市民に対する人権侵害問題について大きな関心を持ち、『プライバシーにご用心』（日本評論社1989年）や『マスコミがやってきた』（現代人文社2001年）、『狙われる個人情報・プライバシー』（民事法研究会2005年）などの著書（共著）を出版。04年、本学法科大学院教授に着任。

【概要】

チタン(Ti)は、軽量、強度、耐食性、生体適合性に優れることから、人工関節や人工歯根などの生体材料に使用されている。一方、歯科臨床では、虫歯予防効果が認められているフッ素を、歯磨剤(歯磨き粉)への添加など、積極的に利用している。そのため、口腔内で使用される Ti 製部材はフッ化物に頻繁に接触することが想定されるが、一般的に高耐食性を示す Ti もフッ化物と接触すると腐食を起こすことが知られている。したがって、フッ化物水溶液中でも耐食性を示す歯科用 Ti 合金の開発が要望されている。

当研究グループでは、フッ化物水溶液中で難溶性の金属フッ化物皮膜をその表面に形成して耐食性を示す金属の一つであるマグネシウム(Mg)を Ti と合金化し、フッ化物水溶液中での耐食性の向上を試みた。高温中で Ti に Mg を拡散浸透させて Ti-Mg 合金を作製した。歯磨剤中のフッ素濃度相当の NaF 水溶液中でこの合金に腐食試験を行い、その腐食速度が Ti に比べて 1/70 倍も減少することを見出した。この新合金はフッ化物が接触する各種機器材料への適用も期待される。当研究グループは、この研究成果を特許出願した(特願 2006-246962)。

【プロフィール】

大阪府出身。1992年大阪大学大学院工学研究科冶金工学専攻修了(博士<工学>授与)後、同専攻助手に就任という生粋の材料屋である。特に、材料電気化学を武器に、材料/環境/応力の相互作用により発生する「環境脆化」に関する研究分野に活動拠点を置く。材料の腐食科学・防食技術に対しても造詣が深い。94年より1年7ヶ月間、米国ペンシルバニア州立大学の先端材料センターに在籍し、金属上に形成される不働態皮膜の成長・破壊モデルの構築に従事する。2005年4月より本学専任講師、2006年4月より助教授として、「材料界面工学」を旗印に、教育・研究に活躍中である。